『備讃瀬戸地域古墳時代後期の土器製塩の分業について』

修士論文要旨

修士２年　末光博史

瀬戸内海に位置する備讃瀬戸地域では弥生時代中期から土器を使用した塩生産が行われ、古墳時代後期になると土器製塩遺跡が島部に立地する。土器製塩遺跡が島部に多数立地することから島部で土器による塩の生産が行われていたことが分かる。しかし島では、塩の生産に必要な土器や木材などの資源が限られていることや島に土器を運搬することを考えれば島部での土器製塩は効率的とは言えない。このような疑問から今回は島内の土器製塩遺跡で土器を製作したのではないかと考え製作遺跡の推定を行った。古墳時代後期の製塩土器には他の時代に使用される製塩土器と異なり土器の口縁部に様々な叩き目を施すことが知られており大久保氏による叩きの構成の研究で備讃瀬戸地域を小地域に分類されている。このように古墳時代後期の備讃瀬戸地域には特徴として叩き調整の種類が多いことと島部に多くの土器製塩遺跡が立地していることにある。備讃瀬戸地域の土器製塩の研究に関しては、製塩土器の編年や流通などの研究は多くあるが土器製塩を行う以前の製塩土器の供給関係についての研究が少ない。また、共伴遺物に関しても製塩土器以外で土器製塩遺跡と呼べるような出土遺物が提示されていないのが現状である。

そこで本研究では、備讃瀬戸地域古墳時代後期の製塩土器に注目し児島半島に立地している土器製塩遺跡を主に分析し土器製塩遺跡の中に製作遺跡として考えられる遺構や遺物について検討した。研究方法としては、胎土分析、叩き目の出土構成、遺跡の分析を行った。

その結果、胎土分析の結果においては、児島半島に立地する土器製塩遺跡から出土した胎土は 3 種類あることがわかったが、児島半島全体に分布が見られるのは 1 種類の胎土のみであった。また、土器製塩遺跡では複数の胎土を持つ遺跡もあれば 1 つの胎土しか持たない遺跡も見られた。このようなことから胎土分析では、複数の胎土を持つ遺跡である阿津走出遺跡と出崎キャンプ場遺跡が産地として考えられる。次に胎土と製塩土器口縁部に見られる叩きの種類を比較した結果、前田遺跡では、時期や叩きの種類の違いで異なる胎土を使用している可能性がある。遺跡の分析では、土器製塩の作業場と生活の場のように遺物や遺構で分類し、その中に土器焼成の痕跡がないか検討したが土器焼成遺構のような特徴を持つ土坑などは確認できず考古学的に土器製作遺跡は証明できなかった。

考察として児島半島を中心とした備讃瀬戸の土器製塩は、児島半島において製塩土器を製作しその他土器製塩遺跡などに供給を行っていた可能性がある。また、製塩土器は 1 回しか使用できないので多量の製塩土器が必要になることから複数の遺跡で協力し供給に応えていたのではないかと考えられる。

最後に今後の課題としては、遺構などで土器製作遺跡の検討が困難であることから師楽的土師器など製塩土器製作集団が製作したと考えられる土師器もあることから、この師楽的土師器と製塩土器を胎土分析することで土器製作遺跡についての検討を行っていくことが重要だと思われる。